



# YA zine

親爺が作る、親爺のための、適当で、いい加減な雑誌



我が輩は親爺である。



たぶんあなたよりも長生きです。

15年振りの再発売

滑らかさと静音性を追求した長寿命マウスパッド  
ステンレス製マウスパッド **SMP-10M**

**BIRD**  
ELECTRON

ステンレス製と聞くが無機的で冷たいイメージがありますが、このマウスパッドは表面の細かなシボ加工により、一般的なステンレスとはひと味異なる触感があります。さらに、このシボ加工がマウスのスムーズな動きを可能にしています。冬でもアルミのような冷たさを感じないので、冷性系の親爺でも安心して使えます。そして何より、ラバーやプラスチック製のような経年劣化がほとんどないので、たぶんあなたよりも長生きする親爺の道具です。詳しくはバード電子オンラインショップをご覧ください。  
<http://shop.bird-electron.co.jp/> tel.044-854-0198

ONLINE SHOP  
**SABism**  
<http://www.sabism.com/>

●iPhone6用錆ケース(全12種類)  
ケース本体はプラスチック製。錆はすべて印刷です。  
2,592円(税込・送料無料)~



錆びた親爺に  
錆ケース



プロフィール写真・宣材・アー写  
各種記念写真から遺影まで  
今を生きているあなたを  
人生をたっぷり生きた親爺が  
粹に撮ります。  
六本木交差点から  
溜池方面に歩いて約5分。

**SABism**  
Portrait  
Studio

島製作所  
tel.03-6441-2604  
mail:info@sabism.com

編集後記  
たまたま仕事でZINE(同人誌)が若者達の間で流行っているということを知りました。最近では印刷代も安くなり、デジタルのおかげで写真やデザインはプロに頼まなくても出来るようになったことがその理由のひとつだと思います。そこで、私はたっぷり親爺ではありますが、写真とデザインを生業にしているZINEは簡単に作れるわけです。あとはやる気とやったことがない編集ですが、やれば何とかなるだろうという軽い気持ちで周りに声をかけました。しかし、どうせ作るならば若者には出来ないことをしたい。それで執筆者や内容、対象読者を全て親爺(40歳以上)に限定することにしました。それならば無理せずにもった親爺達は大手企業に勤める方もいれば、小さな会社の経営者から毎日黙々と絵を描く画家もいます。ただ共通しているのは、私の知り合いだから適当でいい加減な親爺ばかりですが、根は真面目です。何て表現したらいいのかわかりませんが話していて感じるのには真面目さなのです。社会に対して真面目なのではなく、自分に対して真面目なのだと思います。だから頑固で正直者です。そういう人を私が好きなだけなのですが、そんな親爺達のちよつとはみでた部分を紹介出来たらと思います。加齢臭満載、ちよい悪オヤジなんか糞食らえであります。(島)

企画・編集・デザイン：島製作所 発行：島隆志 記事中のクレジットがない写真：島隆志  
有限会社 島製作所 〒106-0032 東京都港区六本木 3-4-35 落合三幸ビル 2F TEL.03-6441-2604  
<http://www.shima-f.com> mail:contact@shima-f.com

# オッサンブルース



とっちゃん、のぶちゃん、やすとっちゃん、うめさん、  
たかやん、よっしよはん、あーちゃん、のぶちん、  
まさとっさん、たっくん、たけちゃん、たかっさん…  
すべてオヤジの呼び名でござる

やたら早朝目覚めが早く  
顔に似合わず信心深く  
神棚、仏壇手を合わせる

オヤジの愛車のハイエース  
別のオヤジはエルフの2t  
そのまた隣の日野レンジャー

地下足袋履くのも様になり  
腕前だけがズバ抜けて  
仕事も遊びも耳にペン

手鼻をかむのも慣れたもの

一服時の団欒でエコー、わかば、峰、ピース  
乳は吸ってもタバコは呑むと猥談話に華が咲く



昼間手に取るワンカップ  
震えが止まると笑ってらあ  
「世界の美女」見て笑ってらあ

夕陽に照らされ影だけ伸びて  
ヨロシク哀愁、家路へと  
晩酌前にひと風呂浴びて  
二級酒片手にテレビ見ながら  
アテのおかずにめはめし

いつの間にやら茶の間でごろ寝  
よく見りやチャックが開いている  
よく見りや白髪が増えている  
あれから幾年経ったのかしら  
今では枕が同じ匂い

よく見りやチャックも開いている  
なんだか少し泣けてくる…  
なんだか少し懐かしむ…

森口裕二



写真の親爺(表紙も)・筆者プロフィール

昭和47年四国徳島県生まれ。京都精華大学・漫画科卒。本人のばんからな風貌からは似合わない繊細で精緻な画風で妖艶な少女や妖怪を描く。作品には共通して昭和の日本的なノスタルジックが漂う。個展やグループ展、雑誌の挿絵、文庫本の装丁画など幅広く活躍。近年では、アジアを中心に海外のアートフェアにも出品。国内外で高い評価を得ている。

<http://moriguchiyuji.com/>

# And in the end, the love you take is equal to the love you make.

最後に君が得る愛は、君が愛した分と同じだけなのさ

Don't trust over thirties = 30歳以上の奴など信じるな。

ミックジャガーかビートルタウンジエントか、誰が言ったかは諸説があるけれど、60〜70年代、ロックが世界を変えるかのような勢いだった頃、ロックに感化された若者の心情を見事に表した言葉として有名だった。

ところが今や自分が50歳を超えた。50歳になった秋、70歳になったポール・マッカートニーが日本に来るとアナウンスされた。行く予定ではなかった。掠れた声のポールが歌うなつメロ大会には興味が無かった。そんなものはロックではない。でも公演前週に知人が「自分のために買っておいただけけれど、仕事の都合でどうしても行けなくなったので譲ります」というチケットが舞い込んできた。

なつメロ大会どころではなかった。

その夜、東京ドームでポール・マッカートニーがエイト・デイズ・ア・ウィークを歌い始めた瞬間、私の目から涙が溢れ、2時間40分後に二度目のアンコール最後のゴールデン・スランパー・キヤリー・ザット・ウエイト〜ジ・エンドのメドレーの最後の二行を歌い終わるまで、目から涙が零れ続けた。2時間40分の間、泣き続けたことは人生で初めての出来事だった。

ビートルズの音楽に意識的に接したのは中学生の頃。ビートルズ

会いの連続の中でビートルズと出会った。でも年齢を重ねるにつれ、出会いと別れが錯綜し、そして次第に二度と会えない別れが増える。多くの人は、かなわぬ夢を思いの中に抱えながら、現実と戦っている。

音楽は思いを鼓舞する。

1965年にシエスタスタジアムを埋めた平均年齢20歳くらいの5万人の思いの総量と、2013年に東京ドームを埋め尽くした平均年齢50歳を超えるであろう5万人の思いの総量は、思いを抱えて生きた時間に膨らまされ比較にならないほど違う。その濃密さも、比べることも出来ないほど違う。

ポールは当日、これはジョンのために歌います、これはジョージの曲です、これはリンダのために書いた曲です、と紹介しながら歌っていた。ポールの人生にとってかけがえのない存在で、もう既にこの世を去った人々への思い。

だからと言って、彼らに対するセンチメントで歌っているようには聞こえない。生き残ったポールが、大切な人を失っても、声が出なくなっても、前を向いて歌っている。ジョンやジョージやリンダの代わりに、ポールは歌い続けている。

1967年にジョンの息子のために歌ったヘイ・ジュードと、2013年に東京ドームで歌われたヘイ・ジュードでは、観賞

ルズは既に解散し、ジョンは育児休業中。ポールはウィングスを率いてアメリカをツアーしていた。その時ですら、初めて聴くはずの多くの曲は「どこかで聴いたことがある」という印象だった。それくらいビートルズの音は世の中に溢れていたのだらう。私はビートルズの音楽を意識的に聴くようになってからも、決してビートルズ・マニアという訳ではなかったし、ビートルズの中ではポールよりジョンに傾倒していた。ましてやエイト・デイズ・ア・ウィークという曲は、もともとポールの曲ではなくジョンの曲、しかも特に好きな曲ではない。

それなのに、その曲をポールが目前で歌い始めた瞬間に、私の目からは涙が溢れた。

音楽は記憶を呼び覚ます。

呼び覚まされる記憶は、その曲を聴いた「いつか」の瞬間の記憶ではない。かつてその曲を聴いた遠い昔と、今目の前で同じ曲をポールが歌っているその瞬間を結びつけ、その間に蓄積された「思い」に被せられていた蓋を抉じ開ける。中学生の頃から今まで、40年近く歩んだ人生の間に自分の中に積もった心の澱。普段は蓋をした心の奥底に沈んでいる澱。音楽はその澱を溶かし、それを涙に変えて溢れ出させた。

10代の頃、人生は出会いの連続だった。夢は未来を実現するためにあった。ビートルズの音楽を聴き始めた頃の自分も、出

用の音楽としては1967年のほうが完成度は高いであろうけれど、そこに込められたポール自身の思いは、2013年の掠れた声のヘイ・ジュードのほうが比較にならないほど深く優しい。そして後半のコーラス部分の5万人の大合唱。ポールの音楽に聴衆が応えているのではない。5万人の大合唱自体が壮大な一つの音楽になっていた。

そして開演前のジングルに引用された二行と、2度目のアンコール最終曲の最後の二行は、全く同じ言葉で繋がっていた。

And in the end, the love you take is equal to the love you make.

若造が信じようが信じまいが、親爺たちは若造などにはわかりっこないほどの愛を紡ぎながら生き延びてきたのだ。

(斎藤陽)

筆者プロフィール

昭和38年、東京生まれ。高校大学時代を通じ雑誌ロッキングオンに執筆。卒業後大手自動車会社勤務、零細運送会社社長を経て、現在大手商社シンガポール法人勤務。



THE END: ビートルズが1969年に発表したアルバム『アビー・ロード』に収録されているポール・マッカートニーが作った曲。このアルバム制作後に解散したのでビートルズ最後の曲とも言われている。さらに「And in the end, the love you take is equal to the love you make.」はこの曲の最後の1行なので、ビートルズ最後のメッセージとも言える。(実際に最後に発売されたのは『レット・イット・ビー』だが、『レット・イット・ビー』は一旦お蔵入りし、その後録音された「アビー・ロード」が先に発売されたという経緯がある。)

# 死んだ親父の愛人と、 歌舞伎町で出遭った。

起業して4年目。まだ30歳の時だった。「もしも、田中社長でいらっしやいますか？私、一年ほど前に新宿の屋台でお会いした上田と申します」。会社にかかつてきた本の電話いきなりそう言われても…である。「どこでお会いしました？と私から声をかけて、その際にお名刺をいただいた者です。あれから、どうにも気になつて眠れないので、二度、私の店に遊びに来ませんか？料金はいただきますよ」。

午前時を過ぎた新宿歌舞伎町の屋台。おでんを突つきながらチューハイを飲んでいた僕の隣に、白いロングの毛皮を纏った、いかにも水商売風の50代とおぼしき女が入ってきた。隣の席に座るなり、僕を妙に気にしている。声をかけられたのは僕が勘定を済ませて立ち上がるうとした時だ。「お兄さん、私、どこでお会いしてますよね？」。僕は特に気にも留めず、率直に返答した。「新宿には滅多に来ないから人違いだと思いますよ」。ごく日常のどこにもある「コマ」記憶を発掘するまでにかんりの時間を要したが、その夜の情景がぼんやりと浮かんできた。

と、まるでスイッチを押したように彼女からサツと笑みが消えた。「そうでしたか。私、何も知らなくて、ごめんなさいね。そうよね、独身でいると忘れちゃうけど、私もそういう歳なのね」。この時、僕は確信した。この人は死んだ親父の愛人なのだ。というのも僕が中学の頃、親父は東京出張中どこかでお酒を飲んだ後、路上で倒れ、救急車で世田谷の病院に運ばれた、と母から聞いていた。そして、混濁した意識のまま九州に搬送されることになる。以来、病床に伏せ、二度と東京に出かけることはなかった。だから、彼女は経緯を知らないまままでいたのだ。父が倒れる直前に飲んでいたところは、このお店だったのである。もしかすると突然姿を消した親父がひよいと顔を出しそうで、ずっとお店を開けてくれたのかもしれない。そう思うと、息子vs親父の愛人という関係ながら、なんだか温かい気持ちに包まれた。それから半年後、僕は再び上田さんに会い、たくなつて、お店に電話を入れてみた。「この電話番号は現在使われておりません」。それ以来、今日まで二度と会うことはない。DNAが導いた、奇跡の数時間。何を目的に神様が引き合わせたかはわからないが、僕の人生のNEWSな出来事、その上位にランクされたことは間違いない。

あれから23年が過ぎた。まだ小さかった娘

それにしても、年後の今になつて…営業電話だろうか？しかし、お金はいらないと言っている。それが本当なら、夕夕酒が楽しめることになる。いや、待て。席についた綺麗なお姉さんが高額なボトルをおねだりしてくるかもしれない。不安もあつたが、一方で、眠れないという彼女の発言も気になり、その日のうちに新宿へ出向くことにした。

風林会館近く、飲食店ビルの2Fに「カルダングクラブ」はあつた。入口に執事のような白髪の紳士が立っている、ドラマに出てきそうな高級クラブだ。「すいません。上田ママさんと呼ばれてきたのですが」。その紳士は「はい、上田オーナーから何つております」と優しい笑みでドアを開けてくれた。そこは、真つ赤なソファがグランドピアノを取り囲むように配置されている、まさにお金持ち専用の遊び場。僕は、優に10名は座れるVIP席に案内され、しかも、たった二人の僕に対し、美女5人がついた。「何をお召し上がりになりますか？」と聞かれたが、想像以上の厚遇は警戒心を呼び起こす。僕は小さな声で「眞露の水割りです」と

は中学では優等生に育ち、偏差値の高い進学校に合格した。が、わずか一年で高校を中退する。彼女の親父、つまり僕は高校こそ卒業したものの、専門学校除籍、その後に入学した大学も除籍。なんだか僕に似ているなあ…と思つていたら、後に僕の会社に入社し、社内恋愛の末、お嫁に行った。僕が結婚した相手も社内恋愛だったので、そこも共通点のひとつだ。極めつけは、やがて彼女が起業したこと。そして僕同様に離婚した。お酒の酔い方もそっくりで、焼酎が大好き。今では親子でボトルを酌み交わすようになってしまった。ひとつだけ似て欲しく

オーダーしたのだが、今更ではあるが、高級なブランドでも頼んでおけばよかった。

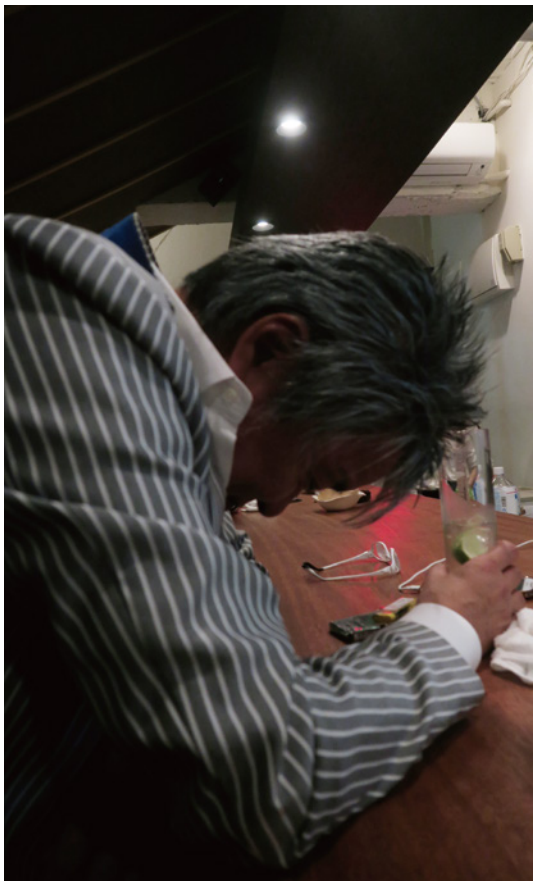
「田中さん、お待たせしてごめんなさいね」と見覚えのある女性が姿を現したのは、すでに入店して二時間は経過した頃だろうか。電話をくれたその人、上田オーナーである。席につくなり、彼女はこう切り出してきた。「ところで田中さんはどちらの出身？」。「九州の佐賀県です」。その回答に彼女は一気に表情を緩ませた。「すべてが腑に落ちました。一年前、どこでお会いしました？とお尋ねしましたよね。でも、あれは勘違いでした。実は私、あなたのお父様と親しくさせていたっていました」。佐賀から上京した人間が、この大東京で…そんな小説のような出遭いが本当にあり得るだろうか。

四人兄弟の次男としてこの世に生を受けた僕は、親戚からも確かに、親父に似ている、とは言われてきた。顔はそうでもない。今、共通点を挙げるなら、佐賀電算センターという会社を創業した「起業家」だったこと。親父は大学の講師もやっていたが、僕も専門学校の講師を10年ほどやったことがある。好きなお酒は焼酎。持病は糖尿病…。確かに共通点は少なくない。それにしても、である。

「今、お父様は何をしてらっしゃるの？」。「10年前に他界しました」。事実のままに答え

ないこと。それは持病の糖尿病。僕が親父から受け取った負のDNA。これだけは絶対に引き継がないでいただきたい、と切に願う今日この頃だ。  
(田中公仁郎)

筆者プロフィール  
昭和38年、佐賀県生まれ。23歳で上京後、コピーライターに。26歳の時に広告企画制作会社を設立。現在、株式会社K'sほかグループ5社を経営。六本木、熱海、京都、サイパンを精力的に巡回中。



六本木の行きつけのバーで酔いつぶれる筆者

大江戸骨董市で若い女性が出品していた手袋。道端に落ちていけばきっとゴミにしか見えないだろう。しかし、彼女はそれを板の上にきちんと並べて商品として売っていた。その汚れ方から想像すると、どこかの町工場で職人が溶接などで使っていたものだろうか。油が染み込んで黒ずみ、継ぎ接ぎだらけの使い込んだ「やれ具合」に惹かれて購入した。きっと彼女も「そこ」を買ってもらいたいのだと思った。道具としての役割を全うした手袋は、撮影用の白い紙の上に置かれた途端にそれは道具ではなく、生真面目な職人気質を感じさせるオブジェとなった。



気真面目な美。

女優 伊澤恵美子と行く

# 昭和な散歩

その一 阿佐ヶ谷住宅



阿佐ヶ谷住宅の一番好きな場所で

阿佐ヶ谷住宅はJR中央線の阿佐ヶ谷駅から徒歩で15分ぐらいいのところにあった日本住宅公団が作った分譲団地だった。2013年から解体が始まり、現在新たなマンションエリアに生まれ変わるうとしている。

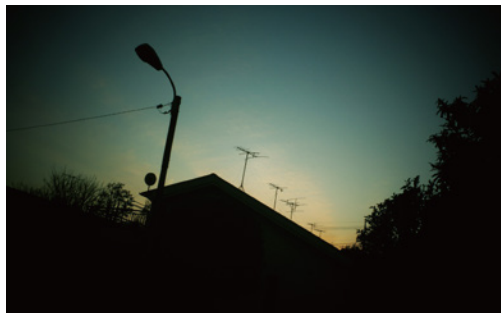
この場所を知ったのは休日に自転車で杉並の住宅街をぶらぶら走っている時だった。そこだけタイムスリップしたような昭和の匂いがある住宅地が目の前に現れた。団地マニアに人気があるということで、ネットでその名前だけは知っていたが、見た瞬間にここがたぶんあの阿佐ヶ谷住宅だろうと思った。広い敷地に整然とでもなく、かといって雑然ともではなく、微妙な配置で住宅が建てられていた。その敷地内に入ってみると、その住宅の古さ以上に、その贅沢とも言える自然を生かした空間が魅力的だった。贅沢と言っても最近の高級マンションのようなこれ見よがしな「高級感」ではなく、無造作に植えられた木々や植物に囲まれたちよと曖昧な空間が贅沢だと思った。勿論それなりに計画されて作られた空間なのだと思いますが、そこにあまり作為的なものを感じられなかった。2階立てのテラスハウスには小さな庭があつて、住む人がそれぞれ勝手に植物を植えていることもそう思わせる原因かもしれない。半分だけ設計して残りの半分は住人が作った空間とも言えた。家と家の境界はあるが曖昧である。この曖昧さも今となって



冬の夕陽に照らされて21号棟の壁面は刻々と表情を変える



非効率的であいまいな空間が阿佐ヶ谷住宅の魅力のひとつ



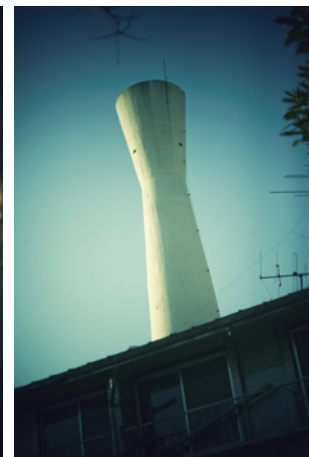
親爺でも無心になれる夕焼け



伊澤恵美子プロフィール  
9歳から舞台上がり、モデル・女優として活動。映画『子宮』に沈める「主演」日タイ国際共同製作映画『アリエル王子』と監視人「主演他ドキュメンタリー」映画「ちいさな、あかり」企画など多岐に渡り活動中。熊本市PR特命大使。  
FB: zawaemiko Insta: emikoizawa

がら過ぎず時間が好きだった。きれいにデザインされた公園よりもずっと気持ちが落ち着く場所だったが、出会ってから1年余りで取り壊しが始まった。このまま残してほしいとは思って替える以上に困難なことが多いのはよく聞く話ではある。その困難を乗り越えてでも残してほしいと思うのは部外者の勝手な言い分だとは思うけれど、こんな場所が東京の真ん中に残っていたら、ちょっと粋じゃないかと思うのである。(島)

★電子書籍を出版している「アサガヤデンシヨ」から住んでいた人達の声や写真などで阿佐ヶ谷住宅を詳しく紹介している「給水塔と赤い屋根」(無料)が発行されています。



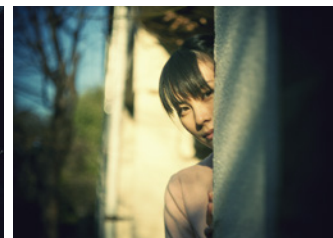
ランドマークの給水塔



一戸一戸微妙に異なるドア



赤い屋根のテラスハウス



初夏の光と緑が溢れる玄関周り



秋の色彩に包まれた通路

は贅沢さを感じさせた理由かもしれない。今ならばもっと効率的に空間を使って、整然と建物を配置するだろう。そして昭和に建てられた割にモダンな建物と空間は、昔横浜で見た米軍用の住宅とオーバラップした。個々の家はそれよりもずっと小さかったけれど。

調べてみると、1958年に日本住宅公団が作った分譲団地で、テラスハウスは前川國男という建築家が設計、また「コモン」と呼ばれる住宅と住宅の間に所々配置された曖昧な空間は公団の津端修二氏のアイデアらしい。ネットには彼の言葉「個人のものでもない、かといってパブリックな場所でもない、得体の知れない緑地のようなものを、市民たちがどのようなかたちで団地の中で共有することになるのか、それがテーマだったのです」とあった。全てを完成形として提供するのではなく、そこに住む人達が作る余白を残した「ゆるい設計」が阿佐ヶ谷住宅が多くの人達に好かれた理由でもあると思う。

その後も休日や事務所に行く途中に立ち寄つてはこの住宅街の中を散歩しながら写真を撮った。既に立て替えた話が進んでいたように、住人も少なく人影もまばら、猫たちが悠々自適に住み着いていた。広い敷地のせいで空は広く、そして静かで、植物は無計画に豊かだった。鳥や動物(と言っても猫が中心)も多く、ここが東京とは思えない時間が止まったような雰囲気があり、休日にここで夕焼けを見ながら

# 「人生を変えたアンケート記事」

むかし、むかし、大昔の話です。

新宿の歌舞伎町という街は、今まで見た事の無い光景が広がっていた。18歳まで人口4万にも満たない地方都市で山や海を相手に生きてきた子供には歌舞伎町の整理されていない路地やゴミ溜めのような雰囲気は新鮮だった。上京した翌月の5月に、シティーロードを手にライブ会場に向かっていた。ジャズクラブ「タロー」は歌舞伎町の雑居ビル2Fにあった。1年ぐらい前に雑誌に掲載されたインタビュー記事で知り、どうしても会いたかった人、ジャズギタリストの高柳昌行グループのライブにやってきました。ついに、ここまで来たよーという気持ちだった。「高柳昌行さんに会える」もって演奏なんてどうでもよかつた。

昼の部 高柳昌行グループ 高柳昌行(♫)  
弘勢憲二(♫) 森泰人(♫) 山崎泰弘(♫)

観客は3名。僕は前から二列目のシートに座った。高柳昌行は、一列目のシートにギターケースを置いた。その時、目が合ってしまい息がつまりそうになったことは今でも鮮明に覚えている。



「モダン・ジャズの歴史」(粟村政昭)とジャズクラブ「タロー」のマッチ

※高柳昌行(1932-1991)  
ジャズギタリスト。19歳でプロ入り。50年代のオーソドックスなジャズスタイルはキングレコードに残る。70年代は阿部薫等とフリージャズ活動。1980年には自己のグループでドイツのメルスジャズフェスティバル出演。1985年よりモーターによる自動演奏と複数音のテープをミックスしたノイズックインプロヴィゼーション(action direct)として活動。レニ・トリスターノ、アストロ・ピアソラを敬愛した。代表作は「プロファイル・オブ・ジョージ」(ギター)「カタファイのテーマ」(シンヤティスク)70年代より私塾を開塾し後進の指導を行っていた。門下生に渡辺香津美、廣木光一、安藤正容、山本恭司、今井和雄、大友良英など。交流が深かったミュージシャンは井野信義(♫)渡辺貞男(♫)富樫雅彦(♫)など。

たミュージシャンは重箱の隅を針先で掘り返すように調べ、初レコーディングや廃盤やゲストとして参加したアルバムまであらゆる事を調べた。当時は情報は限られており、シングジャーナル誌・ジャズ批評誌・レコードの解説等々で、目を通して目当てのミュージシャンの情報はとても少ない時代だった。僕が「若い頃にビル・エバンスのコンサートに行ったよ」というと、だいたい友人は「嘘だろ歳が合わないだろ」と信じてもらえなかった。いや、18歳の時に最後の来日公演を聴いているんだ。ネットで見つけた。

1978年9月21日(木)  
新宿厚生年金会館小ホール(東京)

夏休みに親戚が経営するスナックのグラス洗いのバイト代でチケットを買ったのだと思う。特にビル・エバンスのファンではなかったけれど、初心者はジャズジャイアンツはチェックしなければならぬと思ってた。若いジャズファンは「ジャズはオレの血液みたいなもの」と本気で思っていた。高柳昌行の名前を知ったのは、ジャズ雑誌「ジャズライフ」の創刊号だった。その創刊記念アンケート特集にこんな質問があった。

Q 演奏に際してどのような表現しようとしているか

A 主義化されまたは、PRに取り込まれたような腐った意味ではない、自然観のむずかしさにいどんでいます。(中略) 壮大な命の流れを切断したらどんな音になるだろうか、(中略) 音楽の本質をえぐり出すことが不可能とわかっていても、なお、牛歩を進める事が私の業です。途方もなく深淵で遠い彼岸にあるのでしょつが。

一緒に読んでいた友達は笑った。当然、他の回答者とは全く違う答え…。音を出す事にここまでストイックになれるミュージシャンがいることに驚いた。このアンケート記事が、僕の人生を変えた。

「なんとしても高柳昌行に会わなければいけません。」(齊藤安則)

筆者プロフィール  
昭和35年、北海道生まれ。株式会社ハード電子代表取締役。23歳で電子部品設計製造の会社を設立。18歳の時にロックファンをやめジャズファンになる。高柳昌行の晩年に永くファンであった事を告白し2年間ライブに同行し記録用にビデオ撮影を行う。現在は高柳専門のレール(MRADC)を運営。不定期に未発表音源のCD化を続ける。

## 孤独な勝者



市宮競馬場跡

写真／藤田和男

くにあった三井三池炭坑の閉山と共に徐々に経営が行き詰まり、今は民間に業務委託し、土日に馬券の販売だけをやっています。

以前、場内には定食屋や一杯飲み屋もあり競馬場に来る人たちは、開門10時の1レースから夕方4時の最終12レースまで、おでんや焼き鳥、ビールを飲みながらレースの結果にそれなりに喜憂して日を過ごしていました。今は店も閉じられ、整備されていた競馬場もいつのまにか背丈程の草が生い茂り、錆びた鉄骨の観客席から見る競馬場は、南北に伸びた水平線と大きく開いた青空がただただ広がっているだけです。

なかでも私の記憶に残っている光景の一つに平成二十年の桜花賞があります。この時は3頭の実力馬が人気を集め、誰もがこの3頭の中から3歳牝馬の桜花賞馬が誕生するだろうと思っていました。午後3時40分、11レース桜花賞に私はいつも通り配当のよい三連単の馬券を30通り、合計30000円程買って一緒に来た連れと場内の大型テレビに映し出された阪神競馬場のスタートゲ-

ジを今は遅しと眠んでおりました。テレビ画面は、紳士的な装いのスターターがゆつくりと昇降機の台に昇り、いよいよスタートの合図が送られるところでした。阪神競馬場に詰めかけた8万人の観客の熱気は一気に歓声として沸き上がり、桜満開、花吹雪の芝コース1600mを駆け抜ける3歳牝馬17頭(1頭レース前取り消し)のゲートが開きました。

まず、抑えの効かない逃げ馬がすぐに先頭へ踊り出る。次に先行馬が有利な内側にポジションを求め、その後ろに差し馬が控え、後方に追い込み馬が全体を見ながら脚を進める。スタート良く飛び出た先頭の逃げ馬達を御す騎手は、少しペースを落とし、ゴール前まで余力を残そうと試みるが、年が明けてやると3歳になった牝馬は、騎手の抑える手綱にも反発し、体力だけを消耗させている。向こう正面でスタートし、U字に曲がって観客席前がゴール地点。2度のコーナーを回って直線に向かった時、逃げ馬はもう先行馬に呑み込まれ、その先行馬をめがけ差し馬に騎手の鞭が舞う。それを合図に追い込み馬が馬群の大外からロングスパートを掛け

今年も桜の花吹雪が舞う季節と同時に春競馬が開幕しました。

私が虎視眈々と人生の一発逆転を狙い、春と秋の日曜日に開催されるG1レースの度に通いだし、それからもう10年以上が経ちました。G1レースの馬券を買うに行く場所は、海の見える県境の元市営の競馬場です。創設は昭和3年と古く、近々始める。

1着に飛び込んできたのは意外にも1600mでは不利といわれている外枠の馬。ん！なんだ？！あの馬は！ここ何日も予想を組み立ててきた中で二度もチャックの対象が上がってこなかった馬でした。釈然としない気持ちで持つてきたスポーツ新聞で調べると、なんと1着には12番人気のレジネッタ！2着には、なんととまた15番人気の大外枠エフティマイア、3着にやっと5番人気のソーマジック。私たちの回りにいる観客も全くの予想外の展開に天を仰いでいましたが、不人気馬の上位の着順による高額配当金に興味は移り始めました。中継テレビの電光掲示板が単勝、馬単と順に配当金を映し始めました。単勝4340円、馬連19万6630円、馬単33万4440円、三連複7万8350円、三連単70万2920円。超高配当の表示に驚嘆の声が斉に上がりました。

払い戻し機の前では20、30人の列ができていました。いつもなら、ここの馬券売り場でも

100人以上は並ぶのですが、さすがに今日は少ない。一緒に来た連れに「15番人気の馬を買う人いるんだなあ」と言うのと「ほんと単勝馬券を買っている人でしょ」と答えました。30枚程買った自分の馬券は確認する必要もなく、ここに詰めかけてきた人達もその配当金になかば呆れて大半がぞろぞろと駐車場の方へ帰り始めました。私達も帰ろうとした時、連れが「ちょっと」と肘で私を小突くので、連れの視線の先を眺めました。通常は閉まっているはずの払い戻し機の小さな窓から券売所の職員が一人の男に何か言っています。私は瞬に高額配当金の支払いが頭をかすめました。払い戻し機の前には一人の男が立っています。小窓から「こちらの方から払い戻します。」と言っている。その様子を眺めていると、払い戻し機の小窓から5センチ以上の厚さはあろうかという紙包みを男に直接渡していました。

「さよと700万当てたんだ！」  
連れと二人、思わず顔を見合わせました。700万円の札束の厚さがどれほどなのかは知りませんでした。私達は手の中での紙包みの中身は勝手に700万円になっていました。その男は60代後半の無職と思われる風貌で、古びた背広を着た浅黒い顔をした男でした。笑顔のつも無く、特段嬉しそうでもありません。

「あの親爺、いつもあんな当たりそうもない馬券を買っていたのかな」と私が言うと「ずーっと、何年も狙ってたんだぜ」と連れはちょっと悔しそうに答えました。  
職員が「車で来られたのですか、警備員を駐車場まで付けましょうか」と言っていました。男は軽く手を振り、早くそこから離れたい様子でした。  
「あの親父、今日はこれから、どうするんだらう？」  
「パッと豪遊するんじゃないの？」  
「いや、近所のスナックかどこかでひとり焼酎でも飲むんじゃないの？」  
「700万円もあるのに。」

「あの親爺、仕事もやっそうもないし、愛想もないし、友達もいるように見えないし、意外と今日は数十年住んでいる古いアパートに帰って、今まで何ひとつしてあげたことのない連れ添いに『オイ！』と言って700万円の入った紙包みを渡すんじゃない。」

我々の想像は幾重にも広がっていききました。そんな私たちの勝手な想像をよそに、その男は帰りの雑踏の人影の中に一人消えていきました。

(藤田和男)



筆者プロフィール

昭和34年熊本市生まれ。福岡、東京でカメラマン修行の後熊本市でフリーカメラマンとして独立。競馬歴は約20年。JRAに奉納した額はおそらく税金を上回る。